

実践力と豊かな心を育む農業教育

全国農業高等学校長協会副理事長
静岡県立静岡農業高等学校長 増田 嘉徳



1. はじめに

本校は平成16年度創立90周年を迎える本県高等学校農業教育の中心校として、地域の人々に愛され期待されて農業単独校として、現在に至っている。学校の所在地は、静岡市その市街地の真ん中に位置し、新築された校舎の5階からの眺めは、全市街地と東に富士山を眺められ、緑に囲まれた本校は県都のオアシス的存在である。生徒のほとんどが「入学できてよかった」と思い、生産系、環境系、食品系のそれぞれの生徒は学科の目標と自己の目標達成のため頑張っている。部活動においても、運動部、文化部ともに活躍し生徒は生き生きと明るい学園生活を送っている。

2. 本校の目指す学校像

校訓は「真実・自律・友愛」である。全校集会で年数回校訓に関して校長講話のなかで話している。また、玄関前の庭園の巨石には、現県知事石川嘉延氏の揮毫による刻字が設置され、生徒は朝夕の通学には心にとどめ、日々の生活を自省し、自分の目標に毎日頑張っている。

教育目標は、常に「求めて学び、耐えて鍛える」指導を徹底する。

生徒にはスローガンとして、「自分に厳しく、他人に優しく」を各クラス・学年で楽しい学園生活を送るためにつねに合い言葉として、お互いが努力している。また、各クラスでは、「心身ともに健康で、お互いのよいところを認め合おう」「進路目標を持って、その具現化に努めよう」「授業を大切に、知る楽しさを学ぼう」「社会生活に必要な習慣を身につけよう」「自分自身に挑戦しよう」この5点を基本に、各学年、クラス目標を明確にして指導の徹底を図っている。

3. 学科の構成

本校は都市型農業高校として、多様な進路や生徒

の目標に対応した選択科目を多く取り入れ、生徒の個性を伸ばすことに重点を置いたカリキュラム編成を平成6年度より行っている。学系によるくくり募集を行っているが、一年生では、各学系とも「農業基礎」「農業情報処理」「専門の基礎」等を学んだ後、自分の興味・関心を持った系列を選択し、将来の目標・進路に応じた学習を可能にしている。各学系は3～4の系列を持ち、系列選択によって学科履修が認められる。例えば、生産系では、園芸技術系列、生物工学系列を選択した者は「生物生産科」の学科履修となり、流通経済系列、生産情報系列を選択した者は、「生産流通科」の履修となる。

学系	系列	学科
生産系	園芸技術系列	生物生産科
	生物工学系列	
	流通経済系列 生産情報系列	生産流通科
食品系	食品製造系列	食品科学科
	食品化学系列	
	食品栄養系列 食品調理系列	生活科学科
環境系	環境土木系列	環境科学科
	環境緑化系列	
	環境保全系列	

(注) 一学年6クラスで各学系2クラス

4. 専門教育につなげる科目「農業基礎」の学習

本校の農業基礎実習圃場は、学系ごとに整備されており、生徒1人に与えられる実験農場の面積は約6平方メートルと小面積であるが、春作はスイカ、枝豆、とうもろこし、秋作は大根、ブロッコリーと多品種である。毎朝7時30分頃から8時10分までの間に、栽培作物の生育調査、病害虫の観察、気象観測等調査記録を行い、10人から15人の教員が圃場に出て、生徒の質問や管理の方法について一人ひとり丁寧に指導し、生物の成長に伴う不思議さを体感させている。授業も各学系とも3単位であるが、植物生理や生態、土壌と肥料、病害虫について学習し、つねに圃場中心に実験・実習によって体験的に学んでいる。クラス担任も生徒と同じ圃場と栽培・

観察することにより、生徒と教員が同じ課題に取り組むことは、生徒と教員との信頼感を一層増し、学級経営の大きな要素と



農業基礎実習

なっている。この管理・観察は、土曜・日曜・祝日に関係なく行われ、保護者も生徒の栽培管理に大変関心を持ち、休日には親子で観察している様子が見られる。この「農業基礎」の栽培を通して親子の話題も多くなり、学校と家庭の連携も効果が上がっている。この一年生の「農業基礎」の学習方法や指導方法が、高校生活に大きな影響を与える。「学習の目的、実験・実習の準備、実践、記録、原価計算、品質検査、まとめ、発表」このような過程の中で、そのつど疑問は図書室で調べたり、教師から管理技術について指導されることは、「知る喜び」と「学ぶ方法」を身につけることが農業基礎実習によりできる。このことは今後の学習意欲に大きな力となる。

5. 目標を具現化する徹底した教育

この4月よりスタートする高等学校学習指導要領の第1章第1款 教育課程編成の一般方針として、「生徒の人間として調和のとれた育成。生きる力をはぐくむ。自ら学び自ら考える力の育成。基礎的・基本的な内容の確実な定着。」が掲げられているが、これらの目標の具現化を図るために、各学科の明確な目標を定め、学系、系列の3年間に学ぶ内容すなわち1年生から3年生までのシラバスを生徒・保護者に示すとともに、職業資格や検定の時期、学校行事なども理解させ、自分で学習計画を立案し、実践することが大切である。

基礎・基本をマスターすることにより、学習する喜びを知り、さらに深く調べることを継続すると知らないうちに知識・技術が蓄積され、「やる気」が生まれてくる。

例えば、茶業を学ぶ生徒が栽培から製茶、再製、包装、販売、経理（青色申告）、茶道をはじめ日本の文化等を学んでいくうちに、段々お茶にかかわる歴史、茶の種類と健康など幅広く自分から調べることによって「自分自身で学習方法」を身につけるこ

とができる。特に、生産から付加価値をつけ販売する流通や日本文化まで幅広い学習を行っている。

6. 学校外の教育力の導入

本校では高大連携として、静岡大学・県立大学・富士常葉大学の協力を得て高度な専門教育とキャリア教育を行っている。高度な内容をより優しく理解できる講義は生徒にとって大変好評である。継続教育の学校になりつつある高校にとって貴重な学習機会である。また産業界との連携事業として講師招請やインターンシップもキャリア教育として貴重な体験ができています。これも、大学や企業の皆様の御理解のおかげである。

7. キャリア教育と職業資格取得

学校は生徒に「夢」を持たせ、その具現化に向けて明確な目標を確実に自分のものに消化させ、「生きる力」となる「自信」と「やる気」をつける学びの場である。そのためには、学系や興味・関心のある職業資格、例えば、毒物劇物取扱者資格、危険物取扱者、施工管理者、簿記など50種類以上ある資格試験について挑戦させ、併せて生涯学習の観点から、自分の技を磨き考えさせたい。

8. まとめ

最近、牛乳集団食中毒事件・BSEの発生・無登録農薬の使用、輸入食品の安全性等農業を取り巻く「食と安全性」について相次ぐ問題に国民は不信感を持ちはじめ、有機農法や無農薬栽培による農産物の生産者が示されている食品を少し高くても求める傾向が出てきた。また、生物が共生できる自然環境の大切さが世界的に理解されてきており、自然破壊の現状に「環境問題」にも国民の関心は大変高まっている。特に、食料自給率が30%を割る現在、国民に安全な食料供給が永続されるか心配である。

農業教育の必要性は、誰もが認めるところである。安全な食料の安定供給だけでなく、植物や動物からの精神的な癒しは顕著な効果があると注目されており、食料・農業・環境教育は、今後も人間として生きていく上で最も大切であり、大きな期待がされている領域である。農業教育を通して「豊かな生き方」を創造できる人材の育成に努めたい。